

博士審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森田敦郎

森田敦郎氏の論文『機械の民族誌—タイ中小工業における人とモノの動態についての人類学的研究—』は、タイ東北部を中心とした 2001 年から 2004 年にわたる人類学的フィールド調査によって得られたデータに基づいて、第二次大戦後のタイで発展した独自の機械技術とそれに関わる人々の相互関係についての民族誌的研究である。19 世紀末に誕生した広東人の機械工場にルーツを持つタイ土着の機械工業は戦後の農村部へと広がり、農業機械を中心にした独自の技術を発展させてきた。この産業で生産されている機械は先進国の機械とは異なった奇妙なものである。本論文は機械工たちの世界と彼らが作り出した機械に焦点を当てて、現代のテクノロジーを研究することの人類学的意義を考察する試みである。

本論文の第一部は、タイの機械技術の独特のあり方を捉えるため、今まで比較的等閑視されてきた、モースの技術論および、ルーローの機械概念、そしてストラザーンの民族誌論等によって、機械の作動と、社会関係が相互に成立する在り方を理論化する。この理論的問題設定に続いて、タイ土着の機械工業の概況を紹介し、続く第二部第三章では工場の作業とそこで用いられる言葉や範疇を紹介する。第四章では機械工たちが仕事の中で用いる「見る」ことの技法に焦点を当て、それが身体、モノ、言語などと密接に関係することを明らかにする。徒弟的学習もある意味、観ることの訓練であるといえる。

続く第五章では、この視覚の背後にある、モノの配置に着目する。機械工のルーチンは、部品や道具を配置した現場の空間とそれをもたらすモノの頻繁な移動と密接な関係があり、それを詳細に分析する。第六章では機械工たちの「能力」が、仕事の成果や出来映えといった形で視化されるプロセスを明らかにする。第七章では工場を越えた機械工たちの移動と、万能技能の形成を分析する。

第三部は、タイの機械の独特のあり方に焦点を当てる。第八章では、先進国における機械のあり方を支える諸制度、特に知財やブランドの役割を論じる。第九章では、こうした制度が不在なタイで起きたこと、つまり図面を使わずに中古品を再加工するという独自のシステムの成立を分析する。第十章では、この独特の環境で生まれてきたデザインが、開発に参加したすべての人々に開かれたいわば「コモンズ」と見なされており、それがタイ農業省の独特な農業機械化政策と結びついていることを明らかにする。結論では、これらを総合し、技術と社会への新たなアプローチを提唱している。

本研究の学術的意義は、次の三点にまとめることができる。第一に、これまでタイ研究および文化人類学の文脈において、ほとんど詳細な研究が存在しなかった、修理・機械工の世界の細密な民族誌的研究という点である。文化人類学の文脈において、工場労働のように人と機械が緊密に連携する場面において、その最も重要な、人と機械の複雑な相互作用は、従来それを分析する手法も乏しく、多くは労働者の社会関係等を分析することでその代用とされてきた。森田氏はこの技術的実践の世界に関して、その当事者の世界を内側から深く理解し、その内実を機械とのかかわりで見事に描いてみせた。こうした民族誌的調査は国際的にも類例がないものである。

第二に、こうした人と機械のかかわりを、単にミクロの相互作用に限定せず、それをより大きなモノの流通のシステムの文脈と接合することによって、単に機械が人にとっての道具的存在に限定されず、それ自体がより大きなネットワークの中で流通するあり方を分析した点である。と同時に、タイ人の独自の知財概念を明らかにすることによって、日常的なレベルに現れるタイ独特の技術観が、よりマクロの政策とも密接に関わる様子を喝破し、民族誌的なミクロな視点をマクロの技術政策的な側面とつなげる可能性を示唆したという点である。

第三はこうしたテーマを扱う際に、それを文化人類学の理論的プログラムに深く由来するものとして、モースおよびルーローという先達の業績と接合することによって、こうした技術へのまなざしが、文化人類学そのものの古典的アプローチの中に内在されていたものであるという形で、過去の歴史的理論プログラムを再発見し、現在の科学技術論の文脈と見事に接合してみせたという点である。

審査委員からは、タイ語の記述についての表記の不統一や、こうしたタイ人独自の技術へのアプローチが、タイ全体の技術発展への制約になっている可能性についての議論の不足という指摘もあったが、しかしこれらは本論文の独創性を損なう程の瑕疵ではないと審査員全員が確認した。従って本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。